

走者の独白○丸山健二



角川書店



走者の独白
○丸山健二

角川書店

そうしや どくはく
走者の独白



昭和50年1月30日 初版発行

著者 丸山健二

発行者 角川源義

発行所 かどかわしよてん 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 郵便番号 102
電話(東京)(265) 7111 <大代表> 振替 東京195208

東洋印刷・和田製本

© 1975, Kenji Maruyama
Printed in Japan

0095-883047-0946(0)

走者の独白——目次

雷の光景——走者の独白・序章——

I 山から

好きな場所

伊那谷の動物

阿智村にて

天竜川のこと

土地を棄てる若者たちへ

田園風景の裏に

裏山のへびたち

新しい町

雪の日

春の変化

Uターンの明暗

静かな村

七

二六

二七

三〇

三三

三四

四〇

四七

五〇

五五

五七

六〇

六三

アルプスと大町の追想

六

S L の見える村——北海道の一寒村を訪ねて——

七

タイヤの下敷きになった赤トンボ

八

II 海へ…

海への憧れ

一〇三

船と油と人間と

一〇四

自動化巨船時代の海と人間

一〇五

生マジメ作家航海記

一〇六

二十万トン・タンカーに乗って

一〇七

『黒い海への訪問者』創作ノート

一〇八

III 文学・周辺

小説家になって

一〇九

イメージの世界	一七四
夜の光	一七六
私の文体	一八三
「賞金五万円」——新人賞と私——	一八五
どこ吹く風	一八九
汗とナイフ	一九二
六年前・六年後	一九五
コペンハーゲンのモダン・バレ—	一九九
詩と小説の間	二〇三
田舎暮らしの効用	二〇五
誤解への期待——批評家への提言——	二〇九
小説のなかの《空間》	二一四
小説家が作品の前に踊り出るとき——三島由紀夫の死——	三二一
物書きのひとり言	三三九

IV 日常・その他

- 私の中の日本人——金原純男——
 モーズ 二三八
- 戦無派の八月十五日 二四六
- ヤング・パワーとオールド・パワー 二四九
- 犬 二五五
- ジュースの味——現代漫画考—— 二五八
- 小説家の映画の話 二六一
- 仕事部屋 二六六
- 東京と私 二七三
- 引越しの悲しさ 二七四
- 「礼儀」ということ 二七六
- 石油危機への感想 二七九
- 友を失う道 二八二

犬の飼い方

二八四

オートバイに乗って

二八六

水泳

二九〇

耳栓の効果

二九四

〈著者略年譜〉

二九七

装幀 伊藤鑛治

いかずち
雷の光景

——走者の独白・序章——

先日、わが家に落雷があつた。黒々としたひとかたまりの雷雲がどしゃ降りの雨を伴って、ものすごい勢いで接近してきたかと思うと、強烈な閃光と轟音とが同時に頭上を襲い、電気が切れた。

そのひどく乾いた、ちょっと間の抜けたような破裂音を聞いたのは二度目のことである。かつて別の土地——やはり信州だが——に住んでいたときにも落雷があつて、テレビのアンテナ線が真っ黒になつたり、玄関の呼び鈴がこわれたりした。しかしまあさいわいなことに、いずれの場合も私は無事で、体のどこかがしびれたということもなかった。

田舎に住もうとすると、くれぐれも警戒しなくてはならないことは、村人との付き合い方、マムシ、それに雷である。村人とはなるべく接触しないように気をつけていけばいいし、マムシにやられなくかつたら夕方から夜にかけて川の付近の草むらなどに近寄らなければいいのだ。

ところが、相手が雷となるとそう簡単にはゆかない。もちろん方法がないわけではない。腕時計やバックルや眼鏡といった金属物を全部放り出し、大地にひれ伏すのだ。けれどもそんな屈辱的な真似をしても落ちるときには落ちる。たとえ西洋式の鎧を着て何十メートルもの杉の梢にしがみついても、落ちないときは落ちない。ほかに落ちてもよさそうな物が周囲にいくらでもあるのに、なぜか

水田の真ん中に落ちて、稲を円形状に焼いてしまったりする。

最も皮肉な例としては、雪の降る真冬に一発だけ落ちた雷のために村人が死んだ事件がある。また、最も悲劇的な例では、登山の途中で雷に襲われて高校生が大勢死んだあの有名な事件がある。

この気紛れな雷の音を耳にするたびに、交通事故を目撃したときと同様、人生に対する私の考え方はすっきりとひとつにまとまって、その感動は私にたくさんの小説を書かせた。

現在は、長野県の大町市という、人口三万足らずの小さな町に住んでいる。町といっても私の家のまわりは田んぼばかりで、誰が見ても村である。

少年時代の十年間ほどを過ごしたことがあるほかには、ここは私にとってそれほど特別な土地ではない。いつの日にかきつとまた出て行くであろう、これまで風のように通過してきた村や町と同じような土地のひとつにすぎない。いや、そんなはずはない。ほかの土地よりも詳しいだけに、むしろ失望の度合は深いかもしれない。

まったく知らない土地ならば、自分の好きなように歩きまわって、その地形を自分に都合よく解釈し、あとはただひたすらその上にイメージを重ね、遂には抵抗を受けることなく風景そっくりほぼ完全な形でわがものにできるのだ。

だが、以前に十年間も住んでいた土地となると、しかも身心ともにコントロール不可能な状態にある少年が、数えきれないほどの苦しい思い出を残した土地となると、もはや隅から隅までを勝手なイメージで塗りつぶすことはできない。

当時はごみごみした町のなかに住んでいた。だから、今は町の外に住んでいる。やむを得ない用事

で町へ出て行かなければならないときには、追憶がひしめいているその一面を避けて、わざわざ遠まわりをする。子どもの頃よく遊んだ山へもできるかぎり近寄らないことにしている。してはいるが、ときおりむやみやたらとそこへ足を踏み入れたくてたまらなくなることがあり、それはたぶん犯行現場へ戻りたがるといふ犯罪者の心理と一脈相通じるものがあるのではないだろうか。

引越してからまもなく、この河原を発見した私の喜びを一体どう表現したらいいのだろうか。もちろんそんな大きな川がわずか二十年のうちに消えたり現われたりするはずもなく、高瀬川はずっと昔からそこにあっただのだ。

高瀬川。毎年春になると対岸で草競馬があり、私たちはそれを見物するために、大きな岩がごろごろしている河原を横切り、ズボンの裾をまくりあげて雪どけの冷たい水を運ぶ流れを渡り、松の林を抜けて行ったものだ。あるいは、水晶を手に入れようと、カンカン照りのなかを何時間も歩いたものだ。

しかし、部分的ではあるが、その河原の風景は一変していたのである。私がほかの土地をさすらっているあいだに、変えられてしまっていた。

シェパード犬を連れて、その河原へ踏みこんで行ったときは、今でもはっきり思い出せる。太陽に灼かれた砂や石からたちのぼる熱気の向こうに、まず雑木やススキが見え、それからそのはるか彼方にコンクリート製の怪物たちが横たわっていた。

一瞬私も犬もたじろいで歩みをとめ、しばらくは、奇妙で、巨大なそれらのかたまりをぼんやりと

眺めていた。周囲にはいくつか砂の山があり、その砂に半ば埋まって、トンネルと思えばトンネルのような、橋げたと思えば橋げたのような、どれひとつとして原型をとどめていないまま、どんな目的で造られたのかわからないまま、コンクリートのかたまりは私の眼前にあった。

私はふたたび歩きだした。

特に不思議なのは、コロシアムのような円型の建造物であり、それは中心に向かってゆるい傾斜がつけられ、ちょうど真ん中に円筒状の塔のようなものが屹立していたことだ。そのなかにとびおりてみると、ぐるりとコンクリートの壁に囲まれてしまい、自分の息づかいや足音が反響するのを聞きながら、私はたとえようもない孤独感を味わった。制止したにもかかわらずとびおりた犬は、物をつかむための指がないのでとうとう外へ出られなくなり、私は汗だくになって踏み台になるような丸太を捜しまわった。

そうした無数のコンクリートのかたまりが、実は黒四^{クワシ}ダム建造の際の砂利をとるためのものだったことを教えられ、また、そのとてつもなく大きな規模のダム工事のおかげで村に巨額の金が落ちたことも知って、私は苦笑とともにすべてを納得したのだった。つまり、村人たちの顔つきが変わってしまった本当の理由がわかったような気持ちがあったのだ。

それはともかく、私は却ってそんな河原が気に入り、午後になるとほとんど毎日のように出かけ、さまざまな新しい発見をした。おびただしい数にのぼる流木。古いタイヤ。トンネル内の落書き。もしくは、その位置から望む北アルプスの素晴らしさとか、川下にある化学工場が吐き出す煤煙のものすごさとか、タイマーによって自動的に打ち鳴らされる鐘の音とか。

それはあまりに象徴的な風景であった。その河原からは人々の心を蝕んだ、あるいは蝕みつつある現代のけものたちが丸見えであり、せいづらは異様な静寂のなかに横たわっていた。

そしてもっと不思議なのは、村人がその河原へ近寄りたがらないことだった。おとなはともかく、冒険好きな子どもたちでさえ足を向けようとしなかった。一日中のびのびと愉しく遊べる天国のような空間のはずなのに、子どもらは危険な道で自転車を走らせ、テレビにかじりつくほうを好むのだった。

しかし、私も犬も索漠としたその風景を愛した。眺めるだけではなく、汗をかきながら全速力でその風景のなかを突っ走ることを好んだ。それはまさに私のための風景であった。

河原のようなただっ広い場所で雷に襲われてはひとたまりもない。雷雲が発生しそうな気配を感じたら、逸速く家へ逃げ帰るほうが安全である。逃げ帰る途中、私はいつもこんなことを考える。もし雷に襲われるとすれば、私と犬のどちらだろうかと。腕時計をしているし、ベルトや靴やジーンズや眼鏡にも金属がつかわれているから、私だろうか。いや、犬の首には太い鎖が巻きついている。それとも、私と犬が同時に黒焦げになるのだろうか。

けれどもそのシェパード犬は雷では死ななかつた。ある冬の朝、呼んでも姿を見せないので犬舎のぞいてみると、片眼を開けたまま息絶えていた。私は家の裏に深い穴を掘って、犬を埋めた。聞こえてくる轟音は、雷ではなくて、雪崩なだれによるものだった。

水を前にしたとき心が和むのは、人間が水棲動物から進化した証拠のひとつであるという説を聞いたことがある。岩と岩のあいだをぬって逃げやすい勢いで流れる水もいいが、山の湖のように静かな水を眺めるのもまたいい。

近所に三つの湖が並んでいる。南から順に、木崎湖、中綱湖、青木湖とあり、これを仁科三湖という。面白いことに、すぐ近くにありながらこの三つの湖は、それぞれ性質が異なっている。特に木崎湖と青木湖の差は著しく、陽と陰とはっきりわかれている。木崎湖の水は暖かく、底は白い砂で、しかも遠浅だから遊泳には最適である。だから夏ともなると大勢の観光客が押し寄せて、大いに賑わう。ところが青木湖ときたら、スリパチ状の湖で、水は冷たく、色は無気味で、たとえ遊泳禁止の立札がなくてもそんな気分にはなれない。従って、かつてこの青木湖のある場所が自殺の名所だったことを地元の人に教えられても、おそらく首をひねったりする者はいないだろうと思う。話によれば、そこから身を投げて助かった者はまだいないという。飛びこんだ途端に死んでしまい、深い深い底まで一気に沈むのだという。おそらくそこには、心臓麻痺が起きやすいような冷たい湧き水でもよんでいるのだろう。

家から遠いせいもあって、青木湖にはあまり親しみを覚えない。というより、本当のところは、木崎湖に集まってくる都会の人間たちを眺めることが好きだからかもしれない。都会に住めなかった私が、なぜそれほどまでに都会人の様子を窺いたがるのだろうか。まだ未練でもあるのだろうか。いつの日にか都会へ戻って行きたいと願っているのだろうか。

そんなはずはない。私が都会には二度と住まないのはまず確実である。この先いくつかの土地に見

切りをつけることはあっても、どうまかり間違っても都会へ引越してゆくことはないであろう。あそこにはもう私ひとりの風景をこしらえる余地がまったくないのだから。

田んぼに囲まれた私の傍には、春、夏、秋と農民たちが泥のなかを這いずりまわっている。もっとも、農機具の気ちがいじみた普及によって、近頃では《這いずりまわる》といった表現は適切でないかもしれない。それにしても、かれらの生きざまと、小説を書いて食べている私の生きざまと比較した場合、あまりにも違いすぎる。

土に生きる、そんな基本的な生き方を毎日毎日すぐ隣でみせつけられていると、いかに気丈であっても、いかに説得力のある理屈を待ち合わせていたとしても、いつしか負い目を感じてきて、しまいには原稿用紙に唾でも吐きかけたくなる。

そんなとき私は木崎湖へ出かけなければならない。麻薬中毒者が売人のところへ行くときのよう、私はものすごい形相で木崎湖へ向かうのだ。道の両側の田んぼで働いている人々に心のなかで悪態を浴びせながら、オートバイを突っ走らせる。

湖畔の松林へオートバイを乗り入れ、エンジンを切り、貪るような眼つきで都会人のひとりひとりを見つめる。浮かれて、ばか騒ぎをしている人々を凝視する。それは砂漠で飲む一杯の冷たい水だ。

この世には、馬みたいに働いて、熊みたいに食欲で、カラスみたいに狡猾で、モズみたいに残酷な人間ばかりいるのではないという証しをしばしば確認しないことには、とてもこんなところで長いあいだ小説を書きつづけられるものではない。

それとも私はひそかに自分の書いた小説を読んでくれそうな人間を見たがっているのかもしれない。

ミナミハルオやツガルジョンガラジャミセンのためにはたつぷりと暇と金をかけても、十中八九純文学などに興味を示してくれない人々に囲まれていることにうんざりして、木崎湖に集まる人々にとりとめない期待をかけるのかもしれない。

子どもの頃、木崎湖でボートに乗ることが、私たち一家の唯一の贅沢なレジャーであった。ボートに乗るといってもせいぜい三十分間、長くて一時間、しかもひと夏に一度か二度だった。それもボート代を浮かすためには、行きも帰りも、埃っぽくて暑くて長い道を歩かねばならなかった。泳ぎ疲れた重い体で帰りの道を歩くのは難儀なことだった。途中何度もよその家の水道を借りて、水をガブガブ飲むのだが、いくら飲んでもたちまち汗となって蒸発してしまい、ますます疲れ、あとはもう夕立を待つより方法はなかった。

夏だからといって毎日夕立があるはずもないが、私たち一家が木崎湖へ出かけた日の夕方にはよくどしゃ降りとなったものだ。泳ぎたくなるほどの暑さだから雷雲が発生しやすかったのかもしれない。空が裂け、雷鳴が轟いたかと思うと大粒の雨が降ってきて、道の埃はしずまり、やがて涼風が熱氣を追い払った。私たちは道沿いの家の軒下で雨やどりをし、凌ぎやすくなったことを喜びながらも、雷をひどく恐れた。ある神社の杉の巨木のように、深々と抉りとられたり真つぶたつにされたくなかったからだ。

湖の上空を夕立が通過して行くとき、地上の水と天の水とがぶつかり合う様は、そして夕立が去って湖面がふたたび青い空を映すときの光景は、実に感動的な眺めである。